

なん ぼく し てき
南 北 市 入 羽 糴
2019

第 14 号

発行／長崎県埋蔵文化財センター
〒 811-5322
長崎県壱岐市芦辺町 深江鶴亀触 515-1
TEL : 0920-45-4080 FAX : 0920-45-4082

原の辻遺跡 平成 30 年度調査成果

東アジア国際シンポジウム
『環濠集落 その源流をたどって』
—環濠集落にみる東アジア交流—

平成 30 年度 県内発掘調査概要
太田遺跡・川端遺跡 2 区・寄神貝塚・畑中遺跡・島原道路関連
保存処理について
壱岐高校生徒の研究発表
オープン収蔵展示紹介・イベント情報



第 23 回オープン収蔵展示『発掘された竹松遺跡 - 浮かび上がる大村の軌跡 -』展示出土品

原の辻遺跡 平成 30 年度調査成果

平成 30 年度の原の辻遺跡の発掘は幡鉾川と丘陵部に挟まれた低地部で行いました。原の辻遺跡では丘陵を中心に環濠がめぐっていますが、そのすぐ外側の土地がどのように利用されていたのかを明らかにするという目的で発掘しました。現在は水田として利用されていますが、水田の土とその下の盛土を除去すると、以前の水田の土が出てきました。この水田は出土遺物などから近世・近代のものであることが分かりました。また、近世・近代には石列遺構、畦畔遺構、溝などが造られるとともに、土地を大きく掘削して、水田に造成していたことも分かりました。

調査の主眼であった弥生時代に関連する資料としては、近世・近代の堆積土からわずかに弥生土器の破片、矢じり、凹石（ドングリなどの堅果類を潰したり、磨りおろす道具）などが見つかったただけでした。そのため、環濠から少し離れた地点ではありましたが、弥生時代にはこの土地はあまり活発に利用されてはいなかったということが分かりました。

東アジア国際シンポジウム
環濠集落 その源流をたどって —環濠集落にみる東アジア交流—

シンポジウムでは古澤義久主任文化財保護主事が「環濠集落としての原の辻遺跡」として原の辻遺跡の環濠について発表しました。弥生時代中期に成立した環濠が、弥生時代後期になるとより複雑化することから、一支国の集落の威容を演出する役割があった可能性を指摘しました。釜山博物館学芸研究士は「嶺南地域三韓時代環濠の性格検討」と題して三韓時代の環濠について発表しましたが、環濠の役割として三韓時代前期では防衛的役割より儀礼的要素が目立ち環濠内が祭儀空間として利用され、「蘇塗」との関係も指摘されました。徐光輝龍谷大学教授は「環濠集落に見る東アジア交流」として中国東北地方の環濠集落の展開を中心に発表されました。約 8000 年前から環濠集落が出現し、約 3000 年前にはいくつかの環濠集落が確認されていますが、その後、土城が築かれるようになり、環濠集落は消滅していく過程をたどったようです。松見裕二壱岐市文化財課係長は「環濠集落としてのカラカミ遺跡」と題してカラカミ遺跡の環濠について発表し、特別な空間として山頂部を囲む環濠であったことを指摘しました。韓半島では環濠が消滅する方向に向かうのに対し、同じ時期の日本列島では原の辻遺跡のように、環濠が複雑化するという異なる展開をみせることが分かってきましたが、その背景には中国の土城の影響があったかもしれません。今後の更なる研究の発展が期待されます。



平成30年度

県内発掘

調査概要



太田遺跡 (松浦市御厨町)

竜尾川近くの丘陵下で平成29年に発見された遺跡です。今年度の本調査で、古墳時代後期の土師器や須恵器、弥生時代中期の土器片が多く出土しました。土師器では完全な形の壺と、その横で椀に壺の上半分を被せた状態のものもありました。他にも完形の土師器の椀や甑（炊飯で使う蒸し器）、須恵器の蓋や壺が出土しています。一方で、建物跡などの遺構はなく、炉跡が7か所見つけられました。炉跡は熱を受けた痕が弱く、日常的に何度も使われたとは考えにくい状況でした。7か所が回を重ねて1度ずつ、あるいは同時に火を炊いたような様子が想像できます。

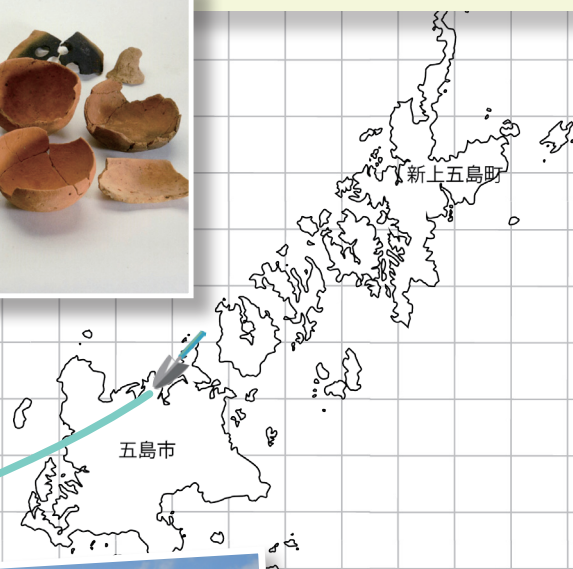
調査地点は竜尾川と支流の合流点に近く、低地と丘陵の境目で、川の蛇行や氾濫時には水際となるような場所です。こうした立地や見つかった土器、炉跡などから考えると、川や水の神様をまつ「川辺の祭祀」が、この地でも行われていたと考えていいのかもしれませんが。



土師器壺・椀出土状況



出土須恵器・土師器



寄神貝塚 (五島市岐宿町)

昭和30年代の発掘調査で弥生時代の竪穴建物跡や土器・石器、骨角器などが見つかった遺跡で、五島列島福江島の北西側に位置する、岐宿町の岬先端の海沿いに立地します。今回は、風力発電設備の工事に伴い五島市が実施する範囲確認調査(※)の支援を行いました。

7月23・24日の夏真っ盛り、現地に着くと青い空と青い海が広がっていました。100mほど沖合いには、素潜り漁にいそむ小型の船が停まっています。美しい景観に癒されるのも束の間、暑さで滝のような汗が噴き出します。熱中症も他人事ではない猛暑です。

発掘調査の結果、3か所の風車設置予定地のうち1か所で弥生土器と石器剥片が出土し、これら遺物を含む弥生時代の地層も確認できました。旧海岸から遺跡の中心である丘陵部へと上る後浜から浜がけ部分にあたり、海岸での活動の痕跡が残っている可能性があります。



遺跡周縁の海岸は玄武岩の岩盤が露出している



調査地点

中遺跡調査地近くの
三合温泉神社と海に向かう鳥居



※ 範囲確認調査：遺跡の規模や内容、範囲を調べる部分的な発掘調査のこと

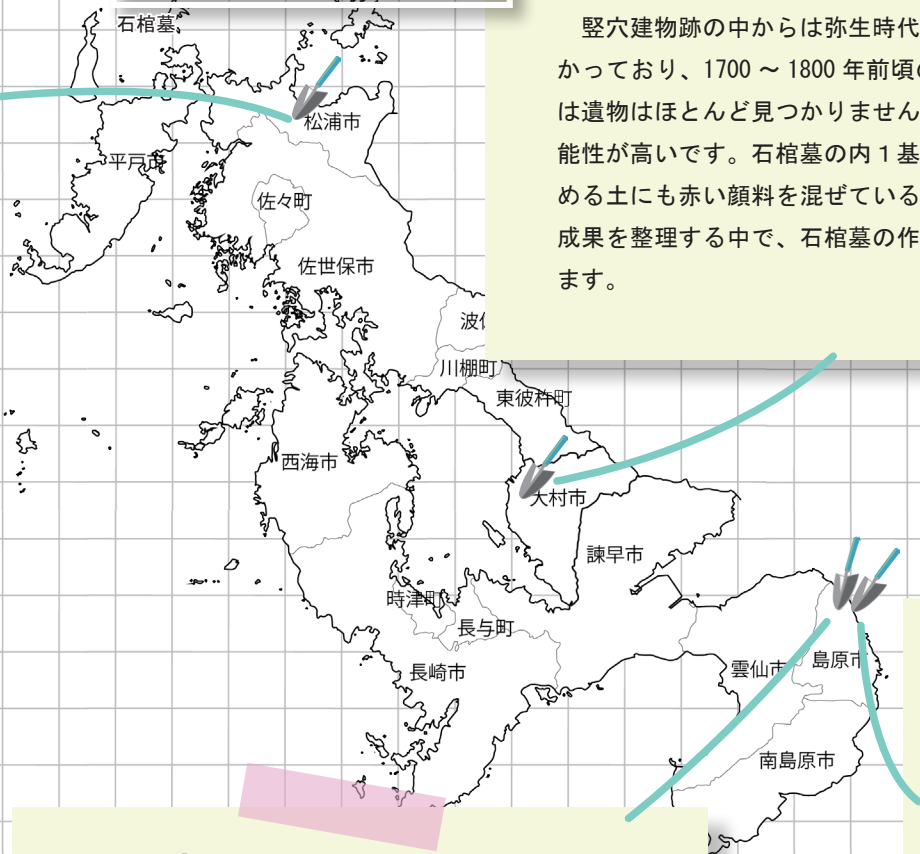
川端遺跡 2区 (大村市鬼橋町)

川端遺跡は大村市北部の扇状地上に立地する遺跡です。過去の調査で弥生時代の遺物や溝の跡が見つかったことから弥生時代の集落の跡と考えられていますが、住居跡は見つかりませんでした。今回の発掘調査では竪穴建物跡1軒と板石を組み合わせて棺にする「石棺墓」が5基見つかり、川端遺跡の集落の様子や、亡くなった人を集落の近くに葬っていたという状況が分かってきました。

竪穴建物跡の中からは弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての土器が見つかり、1700～1800年前頃のものと考えられます。また石棺墓の中からは遺物はほとんど見つかりませんが、建物跡と近い時期のお墓である可能性が高いです。石棺墓の内1基では棺材の板石が赤く塗られ、棺の周りを埋める土にも赤い顔料を混ぜている特徴的な状況を確認できました。今後、調査成果を整理する中で、石棺墓の作り方や類例について詳細な調査を進めていきます。



竪穴建物跡



畑中遺跡 (島原市亀の甲町)

島原半島北東部の海沿いに立地する広大な遺跡で、平成3年の工場建設関連の発掘調査では、縄文時代早期の土器や晩期の埋甕、中世の溝状遺構・掘立柱建物跡・精錬鍛冶遺構が見つかりました。周辺には、弥生時代の有名な集落遺跡の景華園遺跡や小原下遺跡、一野古墳などがあります。遺跡よりさらに海沿いには近世の島原街道が通っていました。

今回は、海沿いを走る国道251号線の歩道・バス停を拡幅する工事に伴い12月初旬に範囲確認調査を行いました。調査の結果、縄文時代早期の押型文土器や後・晩期の土器、弥生時代中期、古代・中世の土器が出土し、これらを含む厚さ70cmほどの遺物包含層を確認しました。

島原道路関連

(島原市津吹町・長貫町・寺中町・原口町)

島原半島と諫早市中心部を結ぶ高規格道路・島原道路の建設に伴い、島原市出平町から有明方面への約1kmの区間で3月初旬に範囲確認調査を行いました。原口B遺跡、寺中A遺跡、長貫B遺跡(隣接地)、津吹遺跡(隣接地)の4遺跡です。

これらの遺跡周辺で行われた発掘調査は少なく遺跡の詳細は不明でしたが、寺中A遺跡と津吹遺跡(隣接地)では縄文時代の遺物包含層が確認できました。出土した遺物には、縄文時代早期の押型文土器や後・晩期の土器、打製石斧や黒曜石の剥片がありました。また、寺中A遺跡では柱穴跡と考えられる複数の小穴が検出され、集落跡である可能性があります。



糸の(?) 白いまじり



調査地点



出土遺物の一部



遺物包含層とピット



約2万年前の火山灰の地層

保存処理について

平成 30 年度出土品の保存処理

遺跡から発掘される出土品の多くは割れていたり、錆びたりした状態で見つかります。人間に例えるならば怪我や病気になった状態です。それらを展示など活用するためには、保存処理や修復の作業が不可欠で、その過程は人間の医療とよく似ています。お腹が痛くなって病院に行くと、問診から入るのが普通で、いきなり「では、この注射を打ちましょう」というお医者さんはいないと思います。

出土品に関してどのくらい劣化しているのか、どのような材質でできているのかなどを調べた上で、適切な薬品や保存処理方法を選択していく必要があります。

長崎県埋蔵文化財センターにはそうした出土品を「診察・治療」する機器がそろっており、平成 30 年度は約 1000 点の出土品を保存処理しました。その中でも杵岐市に所在するカラカミ遺跡から出土した多くの金属製品には目を見張るものがあり、特に「タビ」と呼ばれる鉄器は弥生時代の韓半島で使用された道具で、完全な形で日本で出土するのは初めて！という逸品です。



▲ カラカミ遺跡（杵岐市）出土『タビ』の保存処理

杵岐高校生徒の研究発表

長崎県埋蔵文化財センターでは杵岐高校東アジア歴史・中国語コースの授業支援を行っています。その中で、平成 29 年度からは奈良大学が主催している全国高校生歴史フォーラムに研究論文を応募しています。このコースには島外から離島留学している生徒が半数近く所属しており、歴史豊かな杵岐に生活しながら、杵岐ならではの遺跡を題材に研究をしようと取り組んでいます。

平成 30 年度は島南東部の大浜海岸に伸びた岬上にある大久保遺跡で地表調査を行いました。そこでは黒曜石や土師器などが採取されましたが、縄文時代晩期の土器片の中に半数くらい貝殻粉が混じっていることが確認されました。土器の中に貝殻粉が入っていると破碎してしまうという意見が多く聞かれる中、「実際に貝殻粉が混じった土器が作られるのは何故だろう」と研究に取り組みました。結果は応募数 73 件のうち 10 位以内の佳作に選ばれました。論文は『島の科学』に掲載されています。



オープン収蔵展示紹介

第 22 回オープン収蔵展示

『土器のおはなし展 -ドキュメンタリーながさき-』を開催しました！



▲日本最古級の豆粒文土器（レプリカ）

今回の展示では、日本最古級の豆粒文土器（レプリカ）をはじめ、縄文時代から古代までの土器、虫や植物などの痕跡が残った土器など約 200 点と、杵岐高校東アジア歴史・中国語コースの生徒による土器焼成の研究発表もあわせて紹介しました。

現在は、『発掘された竹松遺跡 -浮かび上がる大村の軌跡-』を開催中です。縄文時代の垂飾品や埋甕、弥生時代の内行花文鏡、獸帯鏡など約 130 点をご紹介します。観覧は無料です。ぜひこの機会にご覧ください。

イベント情報

開催中！

第 23 回
オープン収蔵展示

『発掘された竹松遺跡

-浮かび上がる大村の軌跡-』
縄文時代～古墳時代編

2019 年
3/8(金)～6/30(日)

一支国博物館 1 階

オープン収蔵展示室

発掘成果が目白押し！

いま、注目したい遺跡

